

## 認定臨床染色体遺伝子検査師（染色体分野）および臨床細胞遺伝学認定士について

◎川口 貴子<sup>1)</sup>  
静岡赤十字病院<sup>1)</sup>

染色体・遺伝子検査は、造血器腫瘍の予後や治療方針の決定に必須の検査となっている。また、先天性疾患の染色体検査は以前より診断そのものとなる検査であることが知られている。さらに、最新のゲノム解析の技術によってがんにおいては、遺伝子検査の臨床的重要性が高まっている。

染色体分野における認定試験は、日本臨床検査技師会と日本染色体遺伝子検査学会が共同で行っている認定臨床染色体遺伝子検査師や日本人類遺伝学会が実施している臨床細胞遺伝学認定士がある。認定臨床染色体遺伝子検査師の認定制度目標として記載されていることは、“認定臨床染色体遺伝子検査制度は、臨床に関わる染色体遺伝子検査の適切な利用と検査結果を最大限に診療に反映させるために、専門知識および高度な技術に対応できる検査資格者の育成を図り、染色体遺伝子検査の発展と普及を促進することを目的とする。また、染色体遺伝子検査の精度保証を通して、医療の安全と患者の安心を守り、国民医療の向上に寄与することを目的とする。検査の目的および検体試料の種類に応じて適切な染色体検査、遺伝子検査、FISH 検査を使い分け、判断することができる(染色体分野)”と記載されている。同じように臨床細胞遺伝学認定士認定制度では、“臨床細胞遺伝学認定士は、遺伝医学の深い知識と高度な技術に基づいて染色体検査結果を的確に判断できるスペシャリストとし、染色体検査の適切な実施を推進し、染色体検査の精度と技術向上および臨床細胞遺伝学の発展を図ることを目的として設立している”とある。このことから、染色体遺伝子検査は、染色体遺伝子の専門知識および高度な技術と的確な判断が必要な検査であることが判る。

院内で染色体検査や遺伝子検査を実施する利点として、①結果報告までの期間が短縮できる。②染色体検査では、検体を採取してそのまま検査を行えることから、異常核型の検出率が上がることも挙げられる。欠点としては、①染色体検査では、認定目標にもあるように、検査から結果報告できるまでに技術と経験が重要なため、習得するまでに時間を要する。②専用の機材が必要となる。そのため染色体検査を院内で実施している施設が減少している現状がある。

認定資格取得は、日常業務に役立つまたはスキルアップのために自身が携わっている業務に関係する認定資格を取得しようと目指すのが一般的である。染色体検査業務を院内で行っている施設が少ないことを考えると、院内で行っていない施設では、染色体認定資格取得は不要ではないかと考えられる。しかし、染色体検査を院内実施していなくても認定試験を目指し勉強することは、染色体についての知識が得られ、報告されている結果についても理解ができ、臨床支援などにつながると考える。ただ結果を見るだけからその結果を理解し、そこから興味をもてる分野になる可能性もある。

実際の認定臨床染色体遺伝子検査師、臨床細胞遺伝学認定士の認定試験は、学科と実技に分かれており、学科試験は染色体分野でも遺伝子分野について出題されるため、遺伝子分野も含めた全てを網羅して勉強する必要がある。実技試験は、染色体の展開図が出題され、その展開図を正しく核型に並べて、その並べた核型を正確に核型記載し、その核型結果から導きだされること、臨床側に報告すべき事柄を記載するという実践的な問題である。ただ検査を実施し結果報告するだけでなく、そこから臨床側へ的確に結果を報告できるかまでの過程も求められており、総合的な判断力も必要となる。

医療法の改正によって、染色体・遺伝子分野の精度管理が重要視されており、知識と共に技術の向上もさらに必要となっている。このように記載するとやっぱり染色体の認定は大変だし、院内業務でないからやめておこうと思われるかもしれないが、染色体の認定取得は染色体検査を院内実施していなくても個人のスキルアップにつながる良い機会になると考える。

静岡赤十字病院 検査部 054-254-4311 (内線 2314)